

談話室

談話室

日本人のアラヤ識と西洋人のアラヤ識

佐野幸吉

ヒマラヤという山がある。ヒマは雪、アラヤはたくわえるという意味である。つまり、年じゅう、雪をたくわえる山である。

アラヤ識は、佛教の言葉であり、生まれかわり、死にかわりしている間におけるすべての経験をたくわえた蔵のこと。人間は、アラヤ識の蔵からその意識をひき出したり、たくわえたりして、生き長らえているのだというのである。

ここでは、それを、次のように理解することにする。すなわち、何万年もの昔から、先祖代々、遺伝を繰り返しながら、生きて来た長い間のあらゆる、心的、身的経験を、意識無意識に関係なく、すべてたくわえている蔵というのである。(フロイトの潜在意識やユングの無意識の心理学の提言は約百年前。佛教のアラヤ識は約二千年前。)

したがって、温和な風土の島国で生きて来た、単一民族の日本人と、きびしい風土の大陸で生きて来た、多民族の西洋人とでは、アラヤ識を異にすることは当然である。

そこで、問題になることが三つある。

(1) 学術論文数は、世界の 2~3 位なのに、ノーベル賞受賞者数は、12~13 位である。

(2) 自国籍者の特許権の数は、出願、登録ともに世界一多いのに、技術貿易は赤字がいちばん大きい(科学技術白書、平成 2 年版、130 ページ参照)。それなのに、製品貿易は、摩擦を起こすほど赤字が大きい。

(3) 日本では、課程理学博士の数は、工学博士の数よりも少ないが、英、米、独では、逆で、理学博士は工学博士よりも、はるかに多い。

このような、科学技術における特異な点をもたらしている根本原因は、日本人が西洋人とアラヤ識を異にしているところにあるのではないか。

西洋人が西洋人のアラヤ識で発想して、築きあげた科学技術の基礎的要素を導入して、日本人のアラヤ識で展開するという、今までの方法では、2 番手は走れても、トップは、無理ではないか。

二十一世紀に生き残るためには、基礎研究も、開発研究も、日本人のアラヤ識で発想して、自分らのアラヤ識で展開することが、なによりも大事であることを強調したい。

人間の知能には、二つあり、一つは、Fluid intelligence,

もう一つは、Crystallized intelligence である。前者は、30 才ぐらいで、最高に達し、その後は、急速に衰える。ノーベル賞を受賞したような研究者の多くは、この Intelligence を活用している。後者の Intelligence は、55 才ぐらいまで徐々に発達し、人によっては、80 才~90 才までも、それを続ける。

受験教育、学習指導要領、大学、大学院の設置基準等は、Fluid intelligence の発達を著しく阻害していること間違ない。

高校はいうに及ばず、大学、大学院までも、日本じゅう平均化し、西洋人のアラヤ識を基準とし、ほんとうは、日本人のアラヤ識で、品質管理したような研究機関で、どこでも、ここでも、同じような構想で、研究課題を採り上げるというようなことでは、トップを走るのには難しいのではないか。

MIT 留学記

—鉄鋼から多角化分野へのジャンプ—

栗山和益

住友金属工業(株)未来技術研究所 副主任研究員

近頃では鉄鋼から多角化分野へ転進するケースは珍しくない。しかしその理由は人それぞれであろう。私の場合、先端、発見、新機能……などの言葉が飛び交う世界で仕事をしたい、というのが理由だった。タイミング良く留学が認められ、米国 MIT での 2 年を転進の第一ステップとすることができた。そして現所属も多角化部門の研究所、その名も未来技術研究所である。さて、鉄鋼と多角化部門での考え方、研究の進め方の違いにつき執筆して下さい、とのことなのでそれに沿って話を進めてゆきたいと思う。

まず、多角化分野での仕事はキーワードが前述のように華やかになる反面、より厳しい状況下に置かれる。その理由は、業界体質と客先の違いにあるようだ。よく知られるように、鉄鋼各社は協調体制にあり、「共存共栄」がその基本となっている。多角化分野では「弱肉強食」が基本原理だ。また一貫体制の鉄鋼会社では、各部門の客先が次の工程、つまり身内がお客なのに対し、多角化分野では他人がお客となる。この差が決定的である。身内は良いところを見てくれるが、他人は悪いところを気にする。取引先に新製品を紹介する場合、ひとつでも他より劣るところがあったらダメ、すべての点で優れてはじめて商売になる、とはよく言われることだ。鉄鋼のように客先(下工程)と協力して技術を育む、という気運に乏しい。

また、多角化分野では機敏な身のこなしが要求される。